

工学部・工学研究科の近況

工学研究科長・工学部長 長崎 健



今秋は天皇即位礼正殿の儀が執り行われ日本国の長い歴史と伝統に思いを寄せる良い機会となる一方、昨年に引き続き自然の脅威と国土強靱化の重要性を思い知らされる秋となってしまいましたが、同窓生各位には、ご健勝にお過ごしのことと思います。

貫上佳則副研究科長と川合忠雄教育研究審議員と共に工学研究科執行部として学部・大学院の難局運営に当たり一年半が経過しようとしています。

先ずは昨年に引き続きお目出度いお知らせです。令和元年秋の叙勲で小田一紀名誉教授が瑞宝中綬章を受章されました。心よりお慶び申し上げます。

続いて教員異動のお知らせです。本年3月に、佐伯壮一准教授（生体計測工学）が名城大学、遠藤智司准教授（環境化学）が国立環境研究所、岸田逸平助教（材料物性工学）が京都先端科学大学へ転出されました。一方、4月には金崎順一教授（生産加工工学）、岸本嘉彦准教授（建築環境）が着任され、梁剣波准教授（パワーエレクトロニクス）、北川大地講師（材料化学）が昇任されました。また、10月には佐藤絵理子教授（高分子科学）、鍋島美奈子教授（熱エネルギー）、尾島由紘准教授（細胞工学）、中條壮大准教授（河海工学）が昇任され教育・研究体制のより一層の充実強化に努めています。

次に学生の動向ですが、平成30年度に学部277人、修士197人、博士5人が巣立つ一方、今年度は学部306人、修士195人、博士15人の新入生を迎え入れました。後期博士課程への進学者数の低迷が日本全体で叫ばれる昨今、ここ5年間本研究科では9人→9人→16人→11人→15人と推移しており、6年前の進学者数4人という危機的状況からは脱しつつある状況ではありますが、教育研究の活力は後期博士課程生に依るところは大きく、更なる充足率改善に努めるべく議論を重ねており、同窓生におかれましても社会人ドクターとしてのリカレント教育を検討頂けましたら幸甚です。また、同窓会の支援なくして工学部は立ち行かない程諸々のお力添えを頂いておりますが、今年度から米国ウィスコンシン大学短期研修プログラムを実施するにあたり、参加学生に経済的支援を賜ることになりました。改めてお礼申し上げます。今秋の学祭において報告会が実施

されました。たった2週間という短い経験が学生達をこれほどまでに積極的に遅しくするのかと感心させられ、若者のフレキシビリティを羨ましく思う機会となりました。

さて、今回寄稿するに当たり編集委員会より2022年4月に発足する新大学における新工学部について執筆の重きを置くように依頼されました。まだ不確定で流動的な面も多々あることを含み置き頂きますようお願い致します。

8月に公表されました新大学基本構想をご覧頂いた方も多いかと思いますが、市大工学部は府大工学域と統合し新工学部として新大学の中百舌鳥キャンパスにて教育研究を推進する予定です。教員は基本、工学研究科に所属しますが、電気情報工学科教員の一部は新大学において情報学を強化し、新研究科を設置するに当たり情報学研究科に異動します。新工学部は航空宇宙工学・海洋システム工学・機械工学・建築学・都市学・電子物理工学・情報工学・電気システム工学・応用化学・化学工学・マテリアル工学・化学バイオ工学の12学科で構成されます。教員数260余名、学生定員741名の大組織となり、工学系学部の学生定員では神戸大学や都立大学を上回り、国公立大学トップ10内にランクし、新大学でも中心的な組織に生まれ変わる予定です。

重要なのはその中身ですが、市大工学部では昨年度より工学研究科3教育研究センターを開設し、尖った分野のより一層の強化を行っていますが、新工学部においても、「理工学」・「臨海都市科学」・「フレキシブルデバイス」・「全固体電池」・「スマートドローン」・「先端ものづくり」の分野で強みを発揮すべく教育研究センター構想を準備中であり、センター棟の建設を新法人に要請するなど、工学部を中心とした魅力ある中百舌鳥キャンパスの実現を目指して、準備を進めています。

昨年も書かせて頂きましたが、本学の特徴と伝統を活かしつつ、新大学においてよりよい工学教育・工学研究を遂行できるよう、現任教員一丸となり叡智を絞って社会に貢献していく所存ですので、皆さまにはより一層のご支援をお願い致します。末筆になりましたが、同窓生各位の今後益々のご活躍をお祈り致します。

(工学研究科長・工学部長)